Online publication Apri 1, 2011

序　　文

尾崎　承一[1]　　安田　慶秀[2]

血管炎症候群の多くは原因不明であり難治性の経過をたどるが，その背景には，血管炎が稀少疾患であり大規模臨床研究が難しく，また，疾患モデル動物も少ないため，原因解明と治療法開発が困難であることがあげられる。わが国では血管炎に関する研究班が，厚生省特定疾患研究の一環として 1972 年度から組織され，研究班の名称は変遷したが，今日まで 38 年以上にわたり研究が継続されている。

1972～1975 年度の悪性関節リウマチ研究班(塩川優一班長)，大動脈炎症候群研究班(稲田潔班長)，ビュルガー病研究班(石川浩一班長)の 3 班が一緒になって 1976 年度から系統的血管病変研究班が発足し，1976～1978 年度は塩川優一班長，1979～1984 年度は福田芳郎班長のもとに研究が継続され，1985～1989 年度は系統的脈管障害研究班(三島好雄班長)となった。1990 年度以降は難治性血管炎調査研究班と改称され，田邊達三班長(1990～1992 年度)，長澤俊彦班長(1993～1995 年度)，橋本博史班長(1996～2001 年度)，尾崎承一班長(2002～2007 年度)，槇野博史班長(2008 年度～)と研究が引き継がれてきた。

難治性血管炎調査研究班では，難治性血管炎の基礎研究，大型血管炎の臨床研究，中小型血管炎の臨床研究，ならびに，国際研究への協力に関する分科会を構築して，それらの連携のもとに研究を進めてきた。基礎研究分科会では動物モデルを用いた血管炎の病因・病態の解明と，ヒト血管炎における病因・病態の解析が進められている。大型血管炎分科会では高安動脈炎，バージャー病，炎症性腹部大動脈瘤などの疫学研究，病態解析，血管新生療法などの新規治療法の開発が進められている。中小型血管炎分科会では ANCA 関連血管炎や結節性多発動脈炎などを対象として，疫学研究や前向き臨床研究(JMAAV 研究や RemIT-JAV 研究など)が推進されている。また，国際研究協力分科会では ANCA 関連血管炎の共同疫学調査や血管炎の新たな分類基準の作成への参加などの活動が進められている。

本シンポジウムでは，5 人の演者に研究班の活動を紹介していただくこととした。それらの発表を通して，難治性血管炎に関する基礎研究，臨床研究，ならびに，国際共同研究の最先端が御理解いただけるものと期待している。なお，時間の関係で，すべての研究成果を網羅しきれなかったことを，最後に付記してお詫びしたい。

[1] 聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科
[2] 北海道中央労災病院せき損センター